

おかげで 国語

題字
国語部長
磯村 彰久先生



岡崎市現職研修委員会
国語部

令和6年7月1日(月)
第1号

国語教育の意義

現職研修委員会 国語部長 磯村 彰久

「私の母親は皆さんと同じ年齢のとき、アメリカの戦闘機に機関銃で撃たれました。堤防を歩いて家に帰る途中でした。必死に草むらの中に隠れたそうです。なんとか逃げることができました。母親が生き延びたおかげで、私は生まれてくることができました。そして幸せなことに、これまで一度も戦争を経験しないで過ごすことができました。ところが、昨年の二月にヨーロッパで戦争が始まりました。その戦争は今も続いています。これまで国語の教科書に載っている『一つの花』『ヒロシマのうた』などの戦争の物語の授業をする

とき、どこか遠い昔話のように感じていました。しかし、今では実際に起きるかもしれないと思って読むようになりました。」(令和四年度 卒業証書授与式 校長式辞の冒頭)

私の教員人生は、磐田市立磐田西小学校の四年生担任として始まりました。当時の磐田市の教科書は光村図書でしたが、四年の教科書には、東京書籍と同じく「一つの花」が載っていました。

教員一年目の私は、子供たちの前でたどたどしく範読をしました。後半の、駅のホームの

場面で、おなかを空かせた幼いゆみ子が、出征する父親に、「一つだけちょうだい」とおにぎりをねだります。渡すおにぎりのない父親はコスモスの花を一輪渡します。喜ぶゆみ子を残し父親は出征し、戦死をします。

新任で自分の子供はまだおらず、結婚もしていなかった自分ですが、範読しながら子供たちの前で泣けてしまいました。今でも子供たちの前で読んでいると、この場面で上手く読めなくなってしまう。私が教科書の文章を読んで泣いてしまうのは、国語だけです。

ところで、日本で暮らしている人たちのほとんどは、日本語を普通にしゃべったり、書いています。日常生活で困ることはありません。さらに、

これからの時代、書けない漢字、読めない漢字も意味の分からない言葉もAIが瞬時に教えてくれます。今後、国語の教師は必要なのでしょうか。

私は、これまで国語指導において言語技術を重視してきました。というのも、過去の国語の授業においては、どの時間でも常に「主人公の気持ちを考えよう」というような、別に教員でなくてもできるような授業を見ることが多かったからです。これは、今でも感じており、国語教育ではこれからも留意しなくてはならないことだと思っております。

ただ、それとともに今、泣きながら「一つの花」を読んでいた新任の自分の姿を思い起こします。AIの時代、きな臭い匂いが漂う時代に、国語教育の意義がより高まっているような気がします。

今年の三月に初孫が生まれました。その赤子の顔を見つめながら、この心のしこりを憂いつつ、未来を生きる子供たちが自らの幸せを創り出せる国語教育を願います。

国語部行事予定

- ・七月二十四日(水)
授業力・教師力アップセミナー
〈基礎編〉
国語・書写・図書館
(総合学習センター)
- ・七月二十六日(金)
三教研(書写) 実技講習会
(むらさきかん)
- ・七月三十一日(水)
授業力・教師力アップセミナー
〈専門編〉
国語・書写・図書館
(総合学習センター)
- ・八月二日(金)
三教研(国語) 夏季研修
(田原文化会館)
- ・八月二十九日(木)
岡崎市教育研究大会
(総合学習センター)
- ・九月十日(火)
第二回国語主任会・作文審査会
(総合学習センター)
- ・十一月八日(金)
第二回書写主任会
(総合学習センター)
- ・一月十八日(土)
岡崎市小中学校書き初め展
(岡崎市美術館)
- ・一月二十八日(火)
第三回国語・書写主任会
(総合学習センター)
- ※ 「形成の会」 岡崎・幸田例会
一月中旬開催予定
- ※ 「さわらびの会」
年間三回開催予定

本年度の研究

本年度の研究主題は「言葉による見方・考え方を働かせ、正確に理解し、適切に表現する力を育てる国語科の授業」(一・二次)です。研究主題に沿った、よりよい授業を目指し、実践に取り組んでいきます。

市教育研究大会は、「小学校文学・説明文」「小学校 表現・書写」二中学校」で、研究を進めます。

● 重点的に取り組む視点

① 個の学びを生かし、仲間とともに磨き合う授業

・ 子供自身が学びの価値を自覚した上で、言葉による見方・考え方を働かせながら主体的に学びに向かう授業を目指す。

・ 個の学びを共有し、言葉による見方・考え方を働かせながら吟味を重ねることで学びを深め、正確に理解し、適切に表現する力を育てる。

② 生きて働く国語力を育てる授業

・ 習得から活用、探究まで、系統性をもった段階的な学習過程を組むとともに、各学年のつながりを意識した授業を構築することで、国語科における目標に迫り、生涯に渡って生きて働く国語力を育成する。

・ 「書写」においても、日常に生かす力を高めるために、問題解決的手法を取り入れた学び合いのある授業を目指す。

国語教育自主研究サークル 「さわらびの会」

さわらびの会を開催しました。「授業づくりの基本」を教研レポート作成を見据えて」と題して、次井祥太先生(矢北中)による講義と、担当学年ごとのグループでの授業案検討が行われました。



【参加者の声】

○日々の授業や教材研究をする上で、分からないことや困っていることを解決するためのヒントをたくさんいただきました。物語や説明文の指導のコツも知ることができたので、今後の授業で生かしていきたいと思います。

○抽出児の選び方や、各単元の導入の仕方などを学ぶことができました。授業をどのように進めればよいのか、児童の興味を引き出せるような授業はどのようなものなのか、知らないことばかりだったので、勉強になりました。同じ学年を担当している先生方とお話することで、この単元はこういう風にやったらよ、と教えていただいたのでよかったです。ありがとうございました。

今後も、国語・書写の授業力向上につながる研修を実施していきます。ぜひ、御参加ください。

国語科指導のアイデア紹介

進んで「書く」子供を目指して
「ワニのおじいさんのたから物」の単元では、本のあらすじをまとめて紹介カードを書く活動がある。単元の導入段階で、クラスの本棚に、鬼が登場する本や、宝物や大切な物が登場する本を準備しておいた。子供たちは好きな本を選び、付箋に書いた感想を交流チャートに貼っていく。読んだ本は同じでも、感想も付箋を貼る場所も違う。読書活動が進むほど、子供たちの書く活動への抵抗が減っていったように感じた。

その後、選んだ本のあらすじを書き、互いに読み合うようにした。あらすじだけで友達に本の内容が伝わるように、子供は自分なりの表現を探していく。そこに、進んで書く子供の姿を見ることができた。



竜美丘小学校 里見 真帆